

特集◎今、何が問題か

恐怖とのつきあい方

苧部 直

(東京大学大学院法学政治学研究科教授)

Tadashi Karube

1965年生まれ。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程修了。専門は日本政治思想史。著書に『光の領国 和辻哲郎』(岩波現代文庫)、『丸山眞男』(岩波新書、サントリー学芸賞)、『鏡のなかの薄明』(幻戯書房、毎日書評賞)、『歴史という皮膚』(岩波書店)、『安部公房の都市』(講談社)など。

清水幾太郎と関東大震災

もつとも深いところから人の心身をふるわせ、支配してしまふ感情には、さまざまなものがある。極上の幸福感到に包まれてうっとりする場合や、だいじな他人から愛されているときの悦び、あるいは神聖なものに触れたときの魂の昂揚など、その人が生きている実感をより充実

させる、肯定的な感情も、そのうちに少なからず数え入れることができるだろう。

だが、ずっと強力に人を虜にして、自由な身動きを奪ってしまうのは、むしろ怒り、憎しみ、嫉妬、不安、恐怖といった、通常なら人がなるべく避けたいと思う否定的な感情の方ではないだろうか。同じ突飛な行動でも、喜びで有頂天になった人物がとたんに踊りだす場合と、怒りのあまり我を忘れて暴力に走る状況とを比べてみよ

う。それぞれを目にしたたり話に聞いたりしたとき、自分も同じ心理状態に入ったかのような生々しい現実感を覚える度あいは、前者よりも後者の方が大きいように思える。

昨年三月に日本を襲った東日本大震災は、世界中に大きな衝撃を与えたと言われるが、なぜそれが大きく人の心を動かしたのかと言え、まず第一に恐怖感を呼びおこしたせいだろう。もちろん、実際に激しい揺れと津波を経験し、家族や財産を失なってしまった人と、遠く離れた地の住民とでは、感じた恐怖感はまったく異なっているに違いない。とりわけ、外国でそのニュースに接して衝撃を受けた人々の場合は、被災者に対する同情心の方を強く自覚していた人も少なくはないだろう。

しかし程度の違いはあれ、また直接の経験者とニュースを聞いただけの人との間では断絶と言えるほどの実感の差異があるとは言え、いずれにせよ恐怖感が被災地を中心に、日本全体へ、さらに世界へと広がった。そのことが、大震災という悲劇とその後の復興の歩みに対する幅ひろい関心の基層にあることはたしかだろう。このたびの震災の場合は、さらに原発事故による放射性物質の

飛散という、もう一つの災厄が加わったために、遠く離れた地域にも生々しい恐怖感が広がることになった。

もちろん、震災の直後にみなが感じたような激しい恐怖感は、それほど長くは続かない。そのことは、原発反対のデモがだんだん下火になっているようすからも、明らかになることである。だが、つかのまのことにせよ、これだけ広い範囲の人々が一挙に恐怖感に襲われたのは、日本の近現代史でもまれなことだろう。ひよつとすると、大東亜戦争のさいの空襲経験以来ではないだろうか。このたびの地震・津波・原発事故によって、人々の心理に刻印された恐怖。それはおそらく、人が社会の秩序をとらえる想像力に、深いところで影響を与えずにはいないだろう。今後の世のゆくえを見定め、秩序のあるべき姿を構想するためには、それをじっくりと考えることが必須である。

だが、そうした空気のように広がる感情は、なかなか明確にとらえることができない。そもそも言葉に乗らないもやもやした不安や、それが全身をゆるがす力の烈しさに本人が当惑するほどの心の動きなのだから、たとえアンケート調査による散漫な質問では、その中心にあ